

趣意書

永忠堤（えいちゅうつつみ）の名称について

一般社団法人 岡山藩郡代 津田永忠顕彰会
代表理事 小嶋光信

「永忠堤」名称提案理由

津田永忠は、江戸時代前期（元禄時代の頃）に岡山藩主・池田光政公、綱政公の二君に仕えた岡山藩士で、現存する庶民のための学校としては世界最古といわれる閑谷学校の創設により「教育県・岡山」の礎を築き、世界のモンスーン地帯では最大の干拓といわれる1,900町歩の沖新田をはじめとする約2,500町歩に及ぶ大干拓によって「豊かな岡山」と評されることになる大事業を次々と成し遂げた「天下に比類なき土木巧者」である。

彼の没後300年以上を経た今でも、地元・岡山の人々は身近にある彼の功績を語り継ぎ、その功績に感謝し、親しみを込めて「永忠（えいちゅう）さん」と呼んでいる。

彼の事業の中でも特に、沖新田の干拓は、彼の師でもあった熊沢蕃山の反対をはじめ多くの技術上、財政上の障害を自らの才知で乗り越え、彼の卓越した知識と技術力から河口に「唐樋」と、「大水尾」という遊水地を建造することで旭川と吉井川という大河川の間に広大で豊かな農地を生み出したという功績が大きい。この二大河川の河口付近を干拓すれば洪水の危険が大きいという難問を解決したのが百間川の整備（築堤）にあるといえる。百間川の整備は、岡山城下を洪水の被害から守るとともに、沖新田等の干拓地の灌漑や排水機能をも兼ね備えた、一石二鳥、一石三鳥ともいえる卓越した治水・土木工事であった。

百間川は、旭川がある一定の水量になると、一の荒手を越流し、まず、大きな石などを落とし、二の荒手で中ぐらいの石などを落とし、流れを弱めながら、三の荒手で穏やかな流れへと変えて旭川の氾濫を下流へ放水させるという工夫が施され、整備されてから今日まで、国の改築も相まって洪水などの水害から地域を守っている優れものといえる。残念なことに、三の荒手は明治25年の洪水で消失したが、一の荒手、二の荒手は地域住民の要望を国が受け止め、貴重な文化財として現存させ、現在も機能している。

今日まで脈々と続く百間川の機能は、国の的確な改修により一層の効果を発揮し、2018年7月の西日本豪雨でも岡山市内中心部などを洪水の被害から守るなど、今もなお市民とその生活を水害から守っている。

戦国時代に甲斐の守護であった武田信玄が築かせた「竜王川除場」を地元では現在でも

「信玄堤」と称えているが、これを東の堤とするならば、西の堤は、岡山にあるこの優れた機能を持つ、稀なる越流堤を「永忠堤」として、これからも永く世に伝えていきたい。

以上



位置図

〔参考〕

1. 津田永忠（つだ ながただ）とは
池田光政に見いだされ、その子・綱政の代には藩の
地方行財政のトップともいえる「郡代（ぐんだい）」
として、百間川・沖新田・後楽園など大がかりな
事業の指揮をするなど、一生にわたり岡山藩政に
深く関わった。

また、永忠の功績は土木、治水にとどまらず国宝
の閑谷学校や特別名勝の後楽園など多くの文化的、
歴史的遺構が現在もその姿をとどめ、今もなお機能している。



沖田神社の津田永忠座像

2. 津田永忠の功績について

【地域開発事業】

百間川の築造

岡山城は、旭川の水を堀として利用したため、水衝部の石関町付近では出水の際には激流に見舞われ、時として城下町は大きな被害を受けた。

新田の開発

延宝元年（1673）の大洪水後、数年は大凶作が続き、農民は困窮し、藩財政も窮迫してしまふ。こうした中、永忠は新たな新田の用水確保のため、吉井川から旭川に至る倉安川を開削し、延宝7年（1679）に倉田三新田を干拓した。この倉安川には舟運のための工夫も凝らされ、吉井川筋と岡山城下を結ぶ運河としても重要な役割を果たした。

また、永忠は幸島新田の開発を成し遂げ、河川の河口部の干拓が可能であると実証し、沖新田の開発を決意した。そして、百間川の大改修を経て、元禄5年（1692）に約1900haに及ぶ沖新田の大干拓を開始・完成させ、岡山藩の財政力を高めるとともに領民に夢を与え、さらに、旭川の洪水を防ぐ対策にもなった。

【教育・文化事業】

後楽園

貞享4年（1687）、百間川がほぼ完成し、城下町への洪水被害が軽減され、城の背後の大きな河原も比較的安定して使える土地になった。家老たちは、下屋敷を持っていたが、藩主・池田綱政には下屋敷がなく、通うのに安全で便利な場所に築庭を思いつき、津田永忠に築庭を命じ、完成した。今では、日本を代表する庭園として知られている。熊沢蕃山や岡山藩幹部の反対意見の收拾や様子見のために築庭を命じたという説もある。



岡山後楽園



旧閑谷学校石碑

旧閑谷学校

永忠と旧閑谷学校との関わりは、寛文5年（1665）に池田光政が池田家墓所造営のための候補地選定を命じたことに始まる。光政は和意谷を墓所に、閑谷を学問所とするよう命じ、その造営と管理は40年以上にわたった。

閑谷学校は、備前に造らせた井田を学校領として藩の財政から独立させ、学問の中立性を維持し、藩内の優秀な青年を身分の差なく登用するなど封建時代に世界でも稀なるシステムを構築して、庶民も含む学問の発展と人材養成に寄与した。

3. 津田永忠による百間川築造

【貞享の築堤】

荒手堤の築造は城下の防災が大きな目的であるとともに、百間川として洪水の流路を確保するための築堤の直接の契機は沖新田の開発にもあった。百間川は、①岡山城下を洪水から守る、②上道郡内の小河川の排水を処理する排水路、③新田開発における灌漑と基幹的な排水施設の3つの役割を果たした。

また、永忠は、「治水も開発も」という両方の構想を立て、大水尾と唐樋という樋門の結合という方法を考えた。満潮時は樋門を閉め、用水は河口の遊水池（大水尾）に滞留させ、干潮時に樋門を開き滞留した水を放流することで堤内地の排水を、洪水時には樋門を開き、旭川から分派した洪水を海に流した。

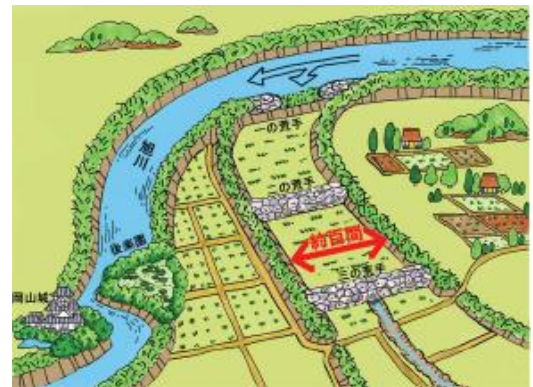
【百間川の築堤】

百間川の荒手堤の「一の荒手」に続いて「二の荒手」、

「三の荒手」を設け、分流した百間川の水の流速を緩めるとともに、流水の運ぶ土砂を沈殿させる効果がある。そして未曾有の大洪水の場合は荒手が流出し、大洪水の被害を最小限に防ぐ工夫がしてあった。

従って、江戸時代にも何度か荒手は損傷し復元されたが、三の荒手については、明治25年の洪水で流失し、現存していない。

また、百間川とは、二の荒手の幅が百間（約180m）あることに由来するといわれている。



貞享の築造時分流部周辺のイメージ

4. 平成から令和にかけての百間川分流部の改築

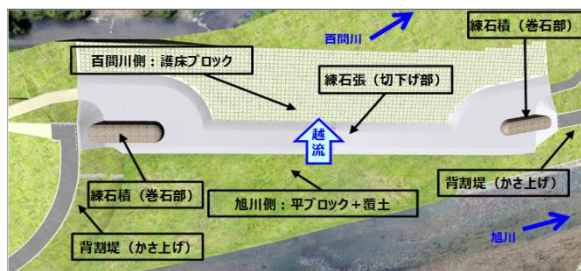
【百間川分流部の改築】

分流部は、空石積み構造であるため洪水により破壊される可能性や旭川の流量が 5,000m³/s を超える大洪水の場合、背割堤の全区間を超え適正な分派ができないため改築が必要となっていた。分流部の歴史的遺構の保全を求める声が地域から上がり、治水機能を継承する具体的な保全方法及び施設構造等が、有識者からの助言をもとに検討され決定した。分流部の改築が完了したことにより、百間川の計画高水流量である 2,000m³/s の適正な分派が可能となった。

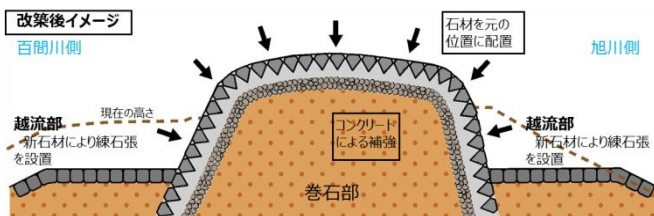
【保存・保全内容】

一の荒手

巻石部（亀の甲）を保全・強化するため、一度解体した後、コンクリートにより補強し、現状の石を使い、元の形状・積み方で復元した。



一の荒手改築イメージ図



巻石部（亀の甲）の改築イメージ図



巻石部 解体前

二の荒手

低水路部の石張りを保全・強化するため、解体した後、コンクリートにより補強し、現状の石を使い、元の形状で復元した。

高水敷部の石張りは現状保存された。



二の荒手 完成状況

以上
2019. 6. 10